

---

# 私がセックスをしない理由

守屋ちなつ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私がセックスをしない理由

### 【Zマーク】

Z9239F

### 【作者名】

守屋ちなみ

### 【あらすじ】

それ以上求めていなくて、ただいるだけで、キスだけで十分だから。

(前書き)

R指定までは『これませんが軽い性的描写』があるので苦手な方は気を付けてください。

深く探るよつに彼の舌が私の舌の裏側をなぞる。

これが彼のお気に入りのキスの仕方だった。

私は彼のシャツを握る指に力を込めて、身をよじって鼻から抜けるよつな声を出して酸素を求めるよつに大きく息をしながら少しだけ離れる。

「だいじょぶ?」

うん、と答えて彼の肩に額を当たた。

彼もうん、と答えて余りにも優しくさるの手で私の髪を撫でる。サラサラと感触を楽しむよつに何度も何度も撫でるその手つきは、砂時計を何度もひつくり返していく子供のよつで、2歳年上の彼を可愛く思つた。

甘えるよつな声を出して、ねだる。

「せんぱー、もう一度ちゅうしてくださー。」

「うん。」

今度のキスは触れるだけ。

唇に軽く触れて、唇の端、頬、最後に唇を舐めてやると彼はふふ、と笑つて抱きしめていた腕に力を込めなおした。

今度は私が彼の少し硬質な髪を撫でた。

シャンプーとワックスと煙草の匂いが混ざつた不思議な匂いはとても心地良ぐ、もっと感じていこと思う。彼の前に顔をうづめた。

「ああ、うん。」めん、「めん

彼は私を引き離して一度深く深呼吸をした。そして毎回同じセリフを言つのだ。

「「めん、我慢できなくなつちやうよ。」

「じゃあ、もう一度だけちゅうしてくださー。」

うん、と若干の不服を込めた返事をしてからキスをした。今度は、深く。

一つまみの罪悪感が頭の片隅に残つてキスに集中できなかつた。冷静に彼からの深いキスを味わつて、舌を軽く吸つてやつた。

彼との付き合いは長い。

それこそ肉体関係は数回あつたが、同じ年数を付き合つた他の恋人同士に比べれば少ないと思つ。別に遠距離恋愛をしてるわけでもないし、滅多に逢わないわけではない。同じ学校にいるし、お互いの都合が合えば逢う。どこかに出かけたりもするし、どちらかの部屋で緩やかな時間を楽しんだりもする。

ただ、セックスをしないだけなのだ。

最初の頃は彼に何度も何故拒むかを聞かれた。別に彼が嫌いなわけでも気に食わないわけでもない。いくら身体が生理的な反応をしたとしても、精神的にしたくないのだ。

頭のどこかで彼とひとつになることを望んでる自分がいたとしても、それを抑えつける。

その理由はとても理屈っぽいのだけれど、私にはとても重要なことだつた。

単純に、怖いのだ。

過去にトラウマがあるわけではない。

ただ、ひとつになるという行為と表現がとてもなく恐ろしいものに感じるのだ。

ひとつに溶けあってしまつ、などという表現をした官能小説のような安っぽいものではない。本当に溶け合つてしまふのではないかと錯覚した彼とのその行為は、彼を失いたくないという小さな独占欲に歪曲した恐怖を植え付けた。

ひとつに溶けあってしまえば永遠に一緒にいられるだらつ。だけど私の髪を撫でる優しすぎる手はなくなつてしまつ。柔らかい温かさを与えてくれる腕はなくなつてしまつ。少しだけ厚い唇にキスすることはなくなつてしまつ。

勿論、そんなことはないのだけれどとても怖かった。

理由を悲しそうな顔で問いただす彼にポツリと打ち明けた時、理解はしきれない顔でわかつたと言ってくれた。仲の良い友達に言っても中々理解は得られなかつたけど、私は構わなかつた。

彼が、そこにいればいいのだ。

それ以上に何かを望まない。

キスをするだけで十分に満たされるのだ。

ふ、と吐息とも声とも言い難い音が彼から漏れる。

「うん、満足。」

グロスを塗りたぐつたかのよに私の唇は彼の唾液で艶々と輝いているのだろう。

少し赤くなつた顔で息を整えていたる彼はやわらかく笑う。そしてまた私の髪を楽しそうに撫でるのだ。

そんな彼がとてもとても愛しく感じて、困らせてしまつと解つてももう一度甘えるような声出して私は言つのだ。

「先輩、もう一回」

身体を押されベッドに倒れこみやわらかく温かい彼の舌を味わう。とうに感覚は麻痺してしまつていて、彼の息遣いだけが現実なのだ。

何度も何度も、繰り返す。

電気も消えてカーテンから差し込む光はほんのわずかで、ベッドのスプリングは慣れたように声を上げる。

でも、私たちにはその先もあともなく、ひたすらお互ひの唇を貪るだけなのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9239f/>

---

私がセックスをしない理由

2011年1月6日10時20分発行